

55年ぶり春へ

2013.3.15

夏の苦い敗戦がエース

大竹耕太郎を全国屈指の左腕に成長させた。「制球力も大事だが、一球一球への意識の大切さを学んだ」。2季連続でチームを甲子園に導いた大黒柱は、再び踏むひのき舞台のマウンドへ静かに闘志を燃やす。

昨秋は県大会、九州大会計10試合を全て1人で投げ抜き、5試合を完封。84イニング89奪三振、防御率1・18と抜群の安定感を見せた。甲子園で2試合完投した自信を胸に、直球の勢いや変化球の切れ、制球力……と投球全般にわたって進化を遂

大黒柱・左腕の大竹

げた。

持ち味の打者の手元で鋭く伸びる直球は最速140キロ。スライダー、カットボール、シュートに加え、チェンジアップ、フォークを覚えた。夏の甲子園3回戦、大阪桐蔭戦で初めて1試合で本塁打3発を浴びた教訓から、縦の変化を意識して投球の幅を広げている。

昨年は夏の県大会、秋の県大会、九州大会のい



黙々と走り込む大竹耕太郎投手。濟々覺（谷川剛）

ずれも連投となった決勝で打ち込まれた。スタミナ不足解消に向け、冬場は走り込みと体幹を中心とした筋力トレーニングを徹底的に重ねた。

「連投になっても、柔軟性を失わない体づくりを徹底した。練習試合が始まった8

日以降、既に3試合に登板した。立ち上がりでの制球にやや苦しむ場面が目立ったが、10日の熊本商戦は7回を6奪三振、失点1とまずまずの投球を披露。「出だしは変化球が定まらなかったで、

直球主体に変えた」と、女房役の安藤太一との息も合ってきた。「2人とも伸びしろはまだある」と池田満頼監督。基本的に調整はバッテリー任せにして見守る。

バックも秋の県大会は準備不足から守備位置が甘くなり、長打を許す場面もあったが、九州大会は4試合で4失策。持ち前の堅守を取り戻しつつある。一冬越え、指揮官も「特にスローイングが安定してきた」と手応えを話す。

投手陣は1年の岡泰成、安樂汰樹の両右腕らが控えるが、公式戦登板はなく、2番手以降の力は未知数だ。「自分一人で投げ抜くためにも『省エネ投法』を意識している」と大竹。大黒柱の自覚も十分にマウンドに上る。（坂本尚志）

連投も覚悟たくましく